

長井市小中学校将来構想検討委員会（第4回）議事録

◇開催日時 令和4年12月19日（月）午後2時30分～午後5時00分

◇開催場所 長井市役所 2階 庁議室

◇日程

1 開会

2 教育長あいさつ

3 講師紹介

【長井市学校教育アドバイザー】

文部科学省大臣官房文教施設企画・防災部

計画課 整備計画室長 廣田 貢 先生

4 議 題 【座長：迎田浩昭委員長】

(1) 将来構想の枠（案）と前回までの振り返り

(2) 本日のワークショップの流れについて

【説明：事務局】

5 ワークショップ 【講師：廣田 貢 先生】

(1) 話題提供 1／学校・地域づくりで大切にしたい視点

(2) グループワーク 1

(3) 話題提供 2／乗り越えるべき課題と全国の挑戦

(4) グループワーク 2

(5) 全体の振り返り

6 検討委員会としてのまとめ

【講評：迎田委員長、江間副委員長】

7 その他

6 閉会

◇出席者（敬称略）

【講師/ファシリテーター】

番号	氏名	属性・役職	第4回出欠
1	廣田 貢	【長井市学校教育アドバイザー】 文部科学省大臣官房 文教施設企画・防災部 計画課 整備計画室長	○

【委員】

※番号に○のついている10名の委員は、令和4年度からの新任者

番号	氏名	属性・役職	区分	第4回出欠
1	江間 史明	山形大学教職大学院 教授 【本会副委員長】	5号委員	○
2	大津 君彦	長井市社会教育委員/育みネット長井会長/子育て連副会長	5号委員	○
3	鈴木 英明	本町商店街 理事長	5号委員	×
④	竹田 啓	長井小学校 校長（小学校校長会会長）	1号委員	○
⑤	赤間 幸生	長井南中学校 校長	1号委員	×
6	迎田 浩昭	長井北中学校 校長（校長会会長）【本会委員長】	1号委員	○
⑦	菅野 弥則	長井市PTA連合会 会長（西根小学校PTA会長）	2号委員	○
⑧	平 浩一郎	長井南中学校PTA会長	2号委員	○
⑨	小野 卓也	長井北中学校PTA会長	2号委員	○
⑩	高橋 美香	長井市PTA連合会母親委員会委員長（西根）	2号委員	○
⑪	木村真由美	長井市PTA連合会母親委員会副委員長（致芳）	2号委員	○
12	上村 正巳	地区長連合会 会長（中央）	3号委員	○
13	青木 与惣右エ門	コミュニティセンター代表	3号委員	○
14	大沼 幸枝	長井市スポーツ推進委員会・女性委員代表	3号委員	○
⑮	赤間 正紀	児童センター父母の会連絡協議会 会長（平野）	4号委員	×
16	渋谷 弘美	白ゆり保育園 園長	4号委員	○
17	孫田 恵	はなぞの保育園 主任保育士	4号委員	×
18	鈴木 裕美子	小桜幼稚園 元教頭	4号委員	○
19	工藤 望美	長井商工会議所青年部・女性代表	6号委員	×
⑳	齋藤 圭央	長井青年会議所 理事長	6号委員	×
21	齋藤 環樹	長井市副市長	7号委員	×
22	竹田 利弘	長井市 政策推進監	7号委員	×
23	青木 邦博	長井市 技監	7号委員	×
㉑	佐藤 久	長井市 財政課長	7号委員	×

【オブザーバー】

※小野卓也教育委員会委員は、令和4年度は検討委員会委員⑨として出席

番号	氏名	属性・役職	第4回出欠
1	遠藤 倫夫	長井市教育委員会 教育長職務代理者	×
2	菊地 和代	長井市教育委員会 教育委員	×
3	鈴木 奈美	長井市教育委員会 教育委員	○

【事務局】

番号	氏名	属性・役職	第4回出欠
1	土屋 正人	長井市教育委員会 教育長	○
2	佐藤 秀人	長井市教育委員会 教育総務課長	○
3	横澤 聡一	長井市教育委員会 学校教育課長	○
4	小阪 寛幸	長井市教育委員会 教育総務課 補佐	×
5	今野 透	長井市教育委員会 学校教育課 補佐(兼)こども未来創造室長	○
6	新野 武憲	長井市教育委員会 教育総務課 教育総務主査	○

◇議事内容

1 開 会

【事務局/佐藤教育総務課長】

ただ今から、第4回長井市小中学校将来構想検討委員会を開催いたします。本日の司会進行を務めます、長井市教育委員会 教育総務課長の佐藤秀人です。どうぞ宜しくお願いいたします。はじめに、長井市教育委員会教育長 土屋正人よりご挨拶を申し上げます。

2 教育長挨拶

【土屋教育長】

皆様こんにちは。本日は大雪の中ご参加いただきありがとうございます。今日は東京、文部科学省から廣田 貢（ひろた みつぐ）先生にお越しいただきました。大雪で交通の乱れも生じている中、来市いただき感謝申し上げます。

さて、最近、致芳コミセンの研修会に参加し、考えさせられたことがありましたのでご紹介いたします。この研修会では、2020 東京オリンピックにも関わった、文教大学の二宮雅也教授から、スポーツについてのご講話を頂きました。スポーツには3つの要素があるそうです。1つ目は、スポーツをする、2つ目は、見る、3つ目は、支える。これらすべてがスポーツなのだそうです。今まで私たちは、スポーツとは自分が汗を流して運動することと思っていましたが、そうではないことに気付かされました。

東京オリンピック開催準備の当時、ボランティアの募集や、子供達を会場に招待し観覧してもらう計画がありました。コロナ禍で子供達の招待は実現しませんでした。スポーツをする、見る、支える、それぞれを保障したいという想いを二宮先生からお聞きしました。

この講話をお聞きし、改めて、私達は新しい価値について考えること、そして私達が新しい価値を創っていく時代であると思いました。この時代の中、本検討委員会では「こんな子供になってほしい」という姿を据え、そのために「こんな学校であればいいな」という想いを、ワークショップを通して交わしています。最初に学校ありきではなく、皆さんが各々で考えた未来の子供像、地域像、素のままのご意見を頂きました。

言い換えれば、私達が行おうとしているのは、子供達を真ん中に据えて、それぞれの立場を超えて、願いを伝え合いながら、長井の目指す学校や地域の姿を明らかにしていく事だと思えます。中長期的には、教育の施策や、各地域と学校がどうあるべきかを検討していく事になると思えますが、その際の拠り所・指標となる今回の将来構想に、皆さんの意見を集約していきます。

本日、廣田先生にはファシリテーターとしてご指導いただきます。加えて、廣田先生には「長井市学校教育アドバイザー」として市長から委嘱させていただいております。この将来構想だけでなく、次期の教育振興計画など、様々なことを進めなければなりませんので、これからもご指導をお願い申し上げます。長井の子供達のための未来を描く貴重な時間となります。皆さんの想いを受け止め、一緒にひとつのものを作り上げていきたいと思えます。どうかよろしくお祈りいたします。

3 講師紹介

【事務局/佐藤教育総務課長】

次に、本日の会議の講師をご紹介します。市長から「長井市学校教育アドバイザー」を委嘱させていただきました、文部科学省大臣官房文教施設企画・防災部 企画課 整備計画室長の 廣田 貢（ひろた みつぐ）先生です。廣田先生、本日はご指導どうかよろしくお願ひいたします。

4 議題

【事務局/佐藤教育総務課長】

続きまして、次第「3 議題」に移ります。委員会設置要綱の第3条第3項により、委員長に座長をお願いします。迎田委員長、よろしくお願ひいたします。

【議長/迎田委員長】

皆さんこんにちは。座長を務めさせていただきます、長井北中学校の迎田です。よろしくお願ひいたします。それでは、議題の（1）と（2）を併せて、事務局から説明をお願いします。

（1）将来構想の枠（案）と前回までの振り返り

【事務局/新野教育総務課主査】

事務局、長井市教育委員会教育総務課の新野です。私からは（1）将来構想の枠（案）と前回の振り返りについて説明いたします。[資料1](#)をご覧ください。将来構想の枠を、案として今回提示致します。枠は4部構成としています。

1. はじめに では、令和2年に策定した小中学校の長寿命化計画を受けての（1）現状と、本検討委委員会第1回での委員意見および第2回市長講話から挙がってきた長井市における（2）前提条件を記載しています。

2. 長井における理想像とは では、筆頭に子供を見据え、（1）こんな子供にし、こんな子供を育てるには、（2）こんな学校に （3）こんな地域に なれば、という内容を記載します。前回第3回のワークショップで皆様から頂いた意見は、（1）から（3）までの間に、共感の☆星印をつけて記載しています。（1）こんな子供に は幹として固定し、第3回ワークで出てきた必要な「力」「能力」を枝として下位に記載しています。（2）こんな学校に （3）こんな地域に は幹となる部分ですが、現時点では空欄となっており、第3回ワークで出てきた「活動」「授業」を枝として下位に記載しています。本日のワーク1では（2）と（3）の空欄となっている、〇〇な学校、〇〇な地域 のキーワードを皆さんに考えて頂きます。キーワードを考えていく際、枝として記載している第3回での皆様のご意見がヒントとなります。

3. 理想を叶えるために乗り越えるべきことは では、（1）子供には （2）学校では （3）地域では （4）全体（子供・学校・地域・家庭での総がかり）では の4構成としています。長井市の場合、特に（4）が肝になると思われれます。また（1）から（4）までの間に、第3回ワークで委員の皆様から挙がってきた「経験」「体験」「他者との関わり」を枝として捉え、事務局で整理して記載しています。これらの枝をヒントとし、枝を束ねる幹、いわゆるキーワードを事務局で検

討し、現段階の案として記載しております。3. のまとめ方については事務局に一任頂きたいと思います。

4. 理想を実現するための具体的な方策とは は、今回の将来構想の結論部分です。ただし、結論は一つではなく、将来の選択肢として複数の案をまとめていきます。この部分は現時点で空白です。本日のワーク2では、この空白部分を皆さんに考えて頂き、理想を実現するための具体的な方策としてどのようなものがあるか、ご意見を賜りたいと存じます。

(2) 本日のワークショップの流れについて

【事務局/新野教育総務課主査】

次に、(2) 本日のワークショップの流れについて説明いたします。**資料2**をご覧ください。今日はA・B・C・Dの4つのグループに分かれてグループワークを行います。メンバーは記載のとおりで、既にグループ毎にご着席頂いております。

今から120分の時間を使い、廣田先生から話題提供を頂きながら、その間にワークを2回行います。

前半の話題提供1は「学校・地域づくりで大切にしたい視点」で、ワーク1のテーマは「目指す学校、地域の姿（ビジョン）を明確化する」です。ワーク1は将来構想の枠の2. 長井における理想像とは (2) こんな学校に (3) こんな地域に に該当する部分です。

後半の話題提供2は「乗り越えるべき課題と全国の挑戦」で、ワーク2のテーマは「理想を実現するための具体的な方策を提示する」です。ワーク2は将来構想の枠の4. 理想を実現するための具体的な方策とは に該当する部分です。

ワーク2が終わった後、廣田先生に全体の振り返りを行って頂きます。

その後、6 検討委員会としてのまとめ で、迎田委員長と江間副委員長からもご講評を頂きたいと思います。事務局からの説明は以上です。

【議長/迎田委員長】

ただいまの事務局の説明について、質問等ありましたらこの場でお願いします。

《質問・意見等なし》

質問等はないようですので、議題を終了します。司会を事務局にお返しします。

5 ワークショップ

【事務局/佐藤教育総務課長】

続きまして、次第「5 ワークショップ」に移ります。それでは、廣田先生、どうかよろしく願いいたします。

(1) 話題提供1 / 学校・地域づくりで大切にしたい視点

【講師：廣田貢先生】

皆さんこんにちは。只今ご紹介いただきました廣田です。これまで3回にわたる皆様のご議論・議事録を拝見しました。この長井市の将来を、子どもたちを、地

域をなんとかしたいという思いを、沢山の意見の中から感じました。最終的な取りまとめを行う前に、今日の第4回でも、皆さんにワークをしていただきたいと思います。これからの長井市の未来に向けて、どんな学校、どんな地域を作っていきたいか、子供達のどんな力を育てていきたいか、皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

◆講師ライフワーク紹介…「未来の風プロジェクト」や「みら研」

冒頭、私が関わっている「未来の風プロジェクト」や「みら研」という団体の活動について紹介したいと思います。これらは、子どもたちの希望溢れる未来を考えるための研究会のような団体です。教育関係者だけでなく、全国各地の様々な立場の方、企業、NPO、児童、生徒の皆さんなど、いろんな人達と対話を広げています。最近では若手から「みらいの学校」について対話してみたいという声がありまして、このテーマを「みら研」で1年間のシリーズでやっていこうとなりました。9月にはWeb会議を開催し、約100人の方々と「みらいの学校」について対話をしました。参加してくれた子供達のうち、代表者の数名に「私が実現したい未来の学校」をテーマに、「誰かに実現してほしい、こうなったらいいな」という学校や、「私が実現したい学校」をプレゼンテーションしてもらいました。プレゼンでは、「スーパー委員会を作りたい」「たくさん学びがある学校にしたい」「特技を伸ばしスペシャリストを育てる学校にしたい」など、色んな思いや願いが沢山出てきました。プレゼン後のグループワークの意見等をまとめると、「学校を自分達で作っていく」ことへの思いが浮かび上がってきました。例えば授業は、先生が教えて生徒が聞くだけではなく、生徒が先生役を担い生徒同士の学び合いのなかで理解を深めていくことはできないか、また授業だけでなく、何かトラブルがあった際はそれをみんなで解決していくべきではないか、など、子供達が主役になって学校づくりをしていきたいという思いがあふれた対話の場となりました。

◆話題提供1…「新しい学校づくり・地域づくりを進める上で大切にしたい視点」

この将来構想検討委員会は大人の皆さんによる対話の場ですが、子供達は何を実現したいと考えているかについても織り交ぜながら、みらいの学校について最終的に取りまとめていくことが大事だと思います。それでは早速、私から話題提供として「新しい学校づくり・地域づくりを進める上で大切にしたい視点」をお話したいと思います。今日はグループワークを2回行いますが、ワーク1と2の間にもう1つ話題提供を挟みつつ、皆さんとの共通認識を持ちながら進めていきたいと思っています。それでは、新しい学校づくり・地域づくりを進める上で大切にしたい視点5つについてお話したいと思います。

①子供を真ん中にして皆が思い・願いを分かち合い・応え合う

1つ目は、「子供を真ん中にする」ことです。これは当然のことなのですが、どんな子供達を育てていきたいのか、そのためにどんな学校や地域をつくっていきたいのか、皆さんからの意見、思いや願いをまとめていく際に、子供を真ん中にするのが1番大事なことだと思っています。子供を真ん中にして皆さんが思いを分かち合い、そして願いを分かち合い、そしてお互いを高めていく、応えあっていくプロセスがとても大切です。これは今皆さんがやっていることでもあります。これからの学校づくりや地域づくりを進めていく上で、大切な営みを皆さんがされていると理解しております。その際、冒頭でお話ししたとおり、子供達自身が何を実現したい

のかという当事者の視点もとても大切です。

「子供を真ん中にする」視点に関して、北海道の浦幌町で行ったワークショップの事例を紹介したいと思います。浦幌町でも、子供達がどう育ててほしいのか、学校の先生、地域の方々、保護者の方々、沢山集まっていたいただいて、それぞれの思いを伺いました。例えば「どこに行っても自分で考え行動できる人になってほしい」「自分の未来を持って頑張れる人になってほしい」「地域や町を理解し、誇りを持った人になってほしい」など、浦幌町の皆さんの色んな願いや思いが溢れたワークショップでした。

長井市においても、先ほど事務局から説明があった資料1を見てもらうと、これまで出てきた皆さんの思いがここに込められています。この願いを形にしていくために、今日と次の会議でステップアップしていければと思います。

②未来思考で考える

2つ目は「未来思考で考える」ことです。「学校はこうあるべきだ」「学校はそもそもこういうものだ」という固定観念を外していくことが大事です。皆さん方が議論しているのは、現在の令和4年度の学校の姿ではなく、今後10年あるいは20年先の学校の姿です。皆さんの思考は、今ではなく、未来に向けて、学校の当たり前や固定観念、思い込みを外していくことを是非して頂きたいと思います。

一方で、現時点での制約はあります。例えばカリキュラム、文科省が定めた学習指導要領がありますので、先生が指導できる範囲と時間には限りがあります。また特殊な活動をする際は、時間や予算の他、地域人材や講師といった人的リソース等、色んな制約や課題があると思います。それらについて目を逸らすのではなく、向き合った上で、その制約をどう乗り越えていくか、視野を外に向けて、外を巻き込み、外のをどれだけ中へ取り込んでいくのかを考えていくことが未来思考です。この検討委員会、そして今日の議論も未来思考で進めていきます。「自分たちがどのような子供を育てていきたいのか」「どんな学校・地域を目指していくのか」「目標に対して今はどうなのか」を見つめて、その上で具体的なアクションを考えるのがバックキャスト思考です。皆さんには、目の前にある課題に向き合った上で、どんなことを方策としていくのか、今日は議論を深めて頂きたいと思いません。

③理想と現実のギャップを捉え、現状の危機感・困り感を克服する

3つ目は、「理想と現実のギャップを捉え、現状の危機感・困り感を克服する」ことです。先ほどの繰り返しになりますが、理想だけを追い求めていって、今現実には直面している課題をおざなりにしてはいけません。現状と危機感・困り感を克服した上で、その先にどう進めるかを考えたときに、いま目の前にある壁をどうやって乗り越えるかについても力を尽くす必要があります。ただし、理想があまりにも高過ぎる場合、いきなりそこに向けて階段をワンステップで登るようなことは出来ません。階段は少しずつ登っていく事で最終的な目的地に到達します。現状の困り感を克服する際、段階を踏みながら、方策をブラッシュアップしていくことも大事です。その上でメリットを最大化して、デメリット・課題を最小化することが必要です。色んな課題がありますので、課題はゼロにはならないかもしれませんが、それを少しでも減らして最小化していくと同時に、方策のメリットを増やして最大化していく考え方が必要です。最初から単純にゼロか100かを考えるのではなく、

階段を一段ずつ登りながら考えていくことも必要です。

④より多くの人々がジブンゴトとして参画する機会をつくる

4つ目は「より多くの人々がジブンゴトとして参画する機会をつくる」という視点です。ここにいらっしゃる皆さんは将来構想を検討するために集まった代表者ですが、長井市には他にも沢山の市民がいます。その方々をどう巻き込んでいくのかも考えていく必要があると思います。新しい学校づくり・地域づくりには一緒に動いてくれる仲間としてより多くの方々呼び込んでいく必要があります。参画の機会として、例えば議会の勉強会、保護者や地域の方々とのワークショップ、学識者も含めた検討会、子供達との対話など、色んなプロセスを踏みながら、1人1人がジブンゴト化していくための時間が必要になると思います。

京都市での、新しい学校づくりのためのワークショップの事例を紹介します。京都市では、「新しい学校でできそうなこと」や「何をしたら楽しい学校に一步近づくか」を考えるグループワークを、多くの方々を巻き込んで行いました。地域の大人や保護者等が積極的に関わることを大切に、子供達の学力向上等の色々な意見をまとめ、これからの将来の学校や子供たちの姿を描いて、それを実際に進めていったプロジェクトがあります。長井市においても、今ここに代表者としていらっしゃる皆さんの他、市民1人1人の思いも大切です。理想の実現に向けて、沢山の方々にジブンゴトとして参画してもらうことが欠かせないと思います。

⑤学校・家庭・地域・行政が協働する

最後の5つ目です。未来を描いた後、それを誰がするのか、成し遂げるのか、といったときに、それを全て学校がやるわけではないと思います。学校だけでなく、家庭が、地域が、行政が、それぞれ自分達の役割を果たしていく、協働していくことが大事です。誰かが何とかしてくれると思うのではなく、自分達が学校や地域を作り上げていく当事者意識をどうやって作っていくか、実際に役割を分担していくのか、ということです。

東京の三鷹中央学園の事例を紹介します。三鷹市では小中一貫教育を行っているので、義務教育9年間で育てたい子供像を明確にし、それに向けて学校でやること、子供達がやること、家庭や地域でやることを、パワーアップアクションプランとしてまとめています。目指す学園生像を実現するためにアクションを起こすのは学校だけではなくて、子供達本人、家庭、地域においても何をするのか分担していくことが極めて重要になります。

長井市のこれからの子供達の姿を描いたときに、それに向けてアクションを起こすのは学校だけ、教職員だけというのではなく、皆で一緒になって取り組んでいこうという機運を盛り上げていくことが大事です。

◆本日の目標…メッセージ性のある将来像を掲げ、具体的な方策を肉付けする

この将来構想委員会について、現在地を一旦確認・整理してみたいと思います。1回目～3回目までの資料を拝見し、これまで皆さんから挙がってきた沢山の意見を読み込みながら考えてみました。私の中で大事だなと思ったのが、この将来構想委員会のまとめを外に発信する際に、メッセージ性をどうするのかということでした。将来に向けて明確なメッセージをどう込めるかということと、それを実現させるための具体的な手立てについて、もう少し肉付けが必要と思いました。

例えば「こんな子供達を育てていきたい」ということについて、資料1には沢山

のことが書かれています。そのためにどんな学校にするのか、どんな地域にするのかということ、メッセージとしてまとめていきたいと思います。これをワーク1で行います。

次に、理想的な姿に対して、どんな課題を克服していかなければならないのかということ、共有することです。これは私の方から話題提供をします。

そして、その課題を乗り越えて、具体的、実践的にどんな事業を進めるかについて、今日のワークショップの後半のワーク2では、理想を実現するための具体的な方策について皆さんに議論頂きたいと思います。

なお、この将来構想検討委員会は、1つの結論や結論の全てを導き出すのではなく、将来の選択肢を掲げることが前提としていますので、今日のワーク2は、これまでの議論で挙げてきたアイデアをブラッシュアップする最初の段階となります。課題を克服するための手立ては、より丁寧に議論することが大切です。現段階で、皆さんで全てを仕上げなければいけないというよりも、今後10年、20年先の長井市の小中学校の将来像の最初の入り口として、どうきっかけを立てるかを意識していただければ良いと思います。

(2) グループワーク1

【講師：廣田貢先生】

それではまず、ワーク1をやってみようと思います。グループワークは安心して対話ができる場とします。皆さんの思いや願い、アイデアを率直に出し合ってもらいたいので、立場の違いは関係なく、また他者の意見を否定することなく、平等に、温かいまなざしでワークを進めて頂きたいと思います。

1つ目のワークは、「〇〇な学校」をつくりたい、「〇〇な地域」をつくりたい、というメッセージの出し合いをしたいと思います。先ほど事務局から資料1の紹介がありました。ここには過去3回分の皆さんの思い、こんな子供達になってほしい、こう育てたい、という思いが溢れています。例えば「世界と上手につながっていける子供」とは、具体的には自分の考えを持ってディスカッション出来るとか、生きた英語力を持っているといったことが「世界と上手につながっていける子供」というワードに集約されています。これから皆さんにやって頂くワーク1は、資料1に記載の子供達の理想の姿、こんな子供達に育てていきたい、ということ意識した上で、「その子供達を育てていくための学校の姿」を文字化する作業を行います。付箋に「こういう学校にしていきたい」という言葉を書いて模造紙に貼っていただきます。その際、多くの市民や子供達に「そんな学校だったらいいね」「そんな学校を一緒につくっていききたいよね」と、市民や子供達から多くの共感が得られるようなメッセージ性を考えることが大切です。

少し難易度が高いアクションかもしれませんが。ただアイデアを出すのではなく、共感が得られそうなメッセージ性があることが大切です。それらを集約し、より多くの共感が得られたものが、最終的にはこの将来構想の大きな姿、テーマのようなものになると思います。まずは子供達を真ん中に据えて、資料1にある理想の子供の姿を意識しながら、多くの方の共感が得られるメッセージ性のあるワードを出して頂きたいと思います。

今から25分間のグループワークのうち、前半は個人ごとに「〇〇な学校にした

い」「〇〇な地域にしたい」というメッセージをどんどん書き出してください。その際「〇〇な子供達を育てていきたい」という、これまでの皆さんの議論の積み重ねを意識してください。メッセージのセンスを意識しすぎると書けなくなってしまうので、自分の心の内側から出てきた言葉を大事にして頂きたいと思います。

始めに、模造紙を2つに分けるように線を引いてください。例えば右が学校、左が地域としてください。後半は皆さんが書き出した付箋を貼りながら、グループで共有、対話してください。類似のものを○で囲んだりしてまとめていくと、まとめることで抽象化され、「〇〇な学校」「〇〇な地域」の新たなメッセージも出てくるかもしれません。その際は模造紙自体に書き込んでください。皆さんが書き出したメッセージの中でも、特に「うちのグループはこれを大切にしたい！」というものを明確にしていってください。その後、全員で他のグループの模造紙を見回る時間を設けます。皆さんにシールをお渡ししますので、共感した付箋やメッセージには、投票するようにシールを貼ってってください。

《ワーク1→他グループの見回り（共感の時間）》

- ・グループワークの模造紙、共感シールの集約結果は次ページ以降のとおり
- ・共感が多かったキーワード・付箋についての凡例は次のとおり

●まとめキーワード（付箋ワードを集約したもの）《ゴシック体》

共感7以上…網掛、太字、下線付き

共感6~4…太字、下線付き

共感3~1…下線付き

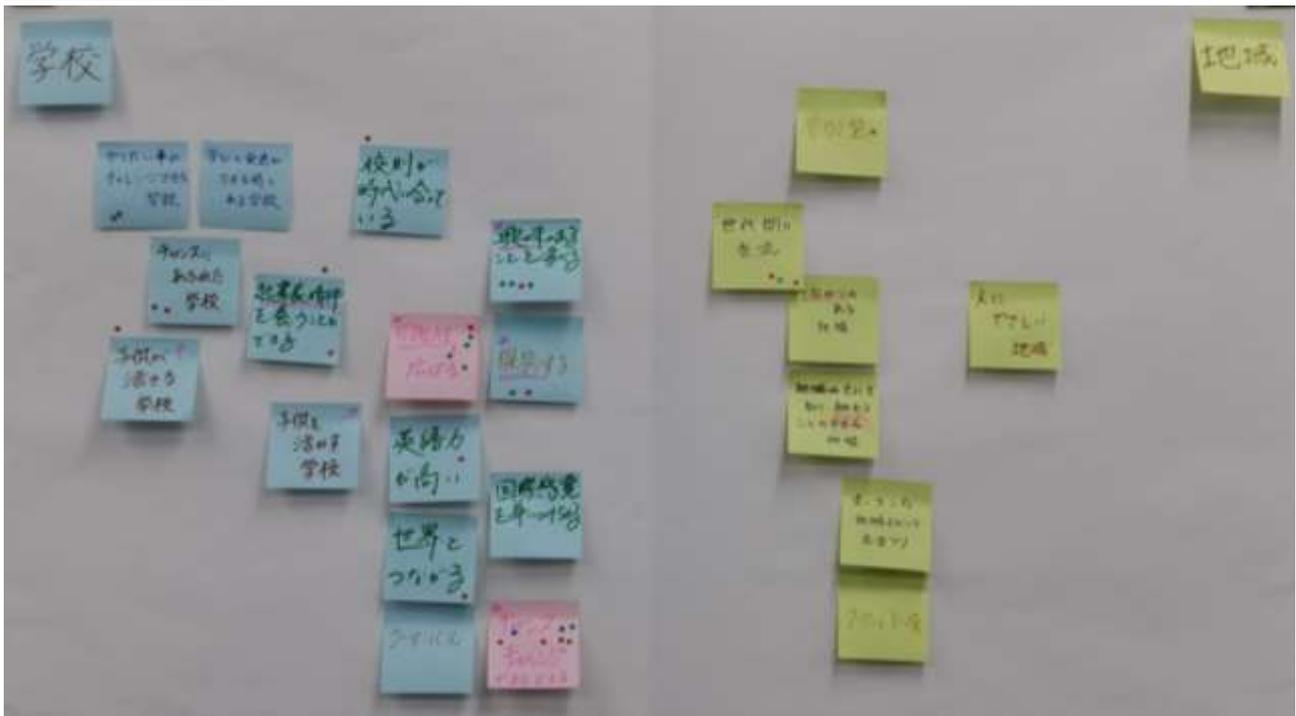
○付箋ワード 《明朝体》

共感7以上…網掛、太字、下線付き

共感6~4…太字、下線付き

共感3~1…下線付き

【グループA】 ワーク1



(2) どんな学校

- 1…子供が生きる学校 (○7…チャンスがありチャレンジできる、○2…やりたいことがチャレンジできる学校、○2…チャンスにあふれた学校、○2…起業家精神を養える、○1…校則が時代に合っている、学びの発表の場がある学校)
- 1…世界とつながる学校 (○1…英語力が高い、国際感覚を身に着ける、グローバル)
- 丸なし…子供を活かす学校 (○5…可能性を広げる、○4…興味のあることを学べる、○2…探究する)

(3) どんな地域

- 1…参加型の地域 (○3…世代間の交流、繋がりのある地域、文化を知り触れ合える地域)
- 丸なし…人にやさしい地域 (オープンな地域イベント・お祭り、フラットな地域)



(2) どんな学校

- 8…自己肯定感の高い学校 (○1…気持ちを言語化するトレーニング、良い所を言えて伸ばす、これが好き！と言える、子供に考えさせる、教科だけでなく得意なことを伸ばせる)
- 5…新授業のある学校 (○1…子供の個性を伸ばす、失敗学の授業、今日のニュースで話し合い、学べる環境がある)
- 2…自由な雰囲気の学校 (自由に発言できる、自発的に行動する、アイデアをもらう・提案できる、この場所があるから行きたい学校、いつも仲間がいる)
- 1…遊びのある学校 (遊びを科学する、友達との共通の楽しみ)
- 丸なし…地域交流のある学校 (地域の人といつでも触れあえる、地域住民が出入りする)

(3) どんな地域

- 15…得意なことを伸ばす地域 (特技を持つ子供の発表の機会、自分の得意分野を教えてくれる先生が地域にいる、子供たちのやりたいことを発信できる)
- 2…交流が盛んな地域 (公民館の会議に子供が参加、気軽に集まれる場、交流できる場と人がいる、地域内ホームステイ、高齢者と子供が同じことをする)
- 2…遊び場の多い地域 (子供が安心して遊べる場所がある、子供の居場所がある、子供の声が聞こえる)
- 1…楽しい行事の多い地域 (子供が参加できる行事が沢山ある、地域行事に参加、外遊びのリバイバル、地域の楽しみの共通認識がある)
- 丸なし…見守りが多い地域 (○4…頼れる大人が身近にいる、子供達を温かく見守る、子供を思いやる)

【グループC】 ワーク1



(2) どんな学校

- 11…子どもの“やりたい”を実現できる (○1…失敗なんて当たり前！な学校、○1…やってみたい気持ち 1つ1つに対応できる学校、やりたい事の選択肢が沢山あり実現できる学校)
 - 5…多様性と専門性 (様々な分野の第一線にいる方から学ぶ機会、日本や世界で活躍する人からオンラインで話を聞ける機会、外国人の生徒がいる、色々な言語が学べる)
 - 3…子供個人のペースでゆっくりじっくり学べる (○3…年齢に拠らない習得優先型の進級システム、○3…学校の独自性・選択制で特定の得意分野がある学校)
 - 3…安心感が高い学校 (○1…自分の居場所と安心感が満ちている、子供が自分の意見を言いやすい環境、子供が先生になり子供同士で学び合える)
- 丸なし…地域学習で地域の方々と仲良くなれる環境、繋がる力が高まる

(3) どんな地域

- 4…子供を認め受け止めてくれる受け皿となる地域 (○4…地域の大人に認められる場所、○1…子供の声を受け止められる、子供の活躍の場がある、地域に不登校の子供の受け皿がある、子供に声と目をかけられる)
 - 1…勤労とマネー獲得が体験できる
- 丸なし…子供達と挨拶し合える地域、世代を超えて交流できる、学校と地域行事の共有、近くの会社も一緒にする



(2) どんな学校

- 10…子供が学びを選べる (一日の半分は学びを選択できる、課外授業を選べる、学びを選べる)
 - 8…学校の中に学校じゃない場所がある (○1…教員以外の人が沢山いる、校舎の中に小さな地域がある、学童以外の子供も自由に集まれるフリースペースがある)
 - 7…やりたい事へのチャレンジができる (やりたいことにチャレンジ、子供の“やりたい”を具現化する、個々の追求テーマに対応できる、子供達のチャレンジをサポートする)
 - 2…安心づくりがなされている (個性を大切にできる、みんなで良いところを褒め合う、違いを認められる、ジェンダーで悩む人も平等、困っていることを相談でき、困っている人に気づける、支援が必要な子供がトレーニングで不安なく過ごせる)
 - 1…校外授業がある (○1…子供と一緒に大人も学べる、学校外でも学びを求める、充実した課外活動ができる)
- 丸なし…子供の主体性がある (主体的に提案が出せる、子供達でルールや授業が作れる、子供が課外活動を発表できる、子供達が自分の考えを表現できる)
- 1…他の学校に行って学べる

(3) どんな地域

- 5…顔なじみで絆のある地域 (子供の顔と名前がわかる、誰もが子供に関わる、子供が雑談できる、いつの間にか余所者も顔なじみになる、子供の顔を覚えてもらい地域の人との関わりを持つ)
- 5…地域主体の課外授業がある (課外活動を選べる、子供対象のイベント等、充実した課外活動ができる、子供の社会参加やキャリア経験、伝統行事を守っていけるような地域に)
- 2…安心づくりがなされている (みんなで良いところを褒め合う地域、安心して遊んで経験を蓄積できる、楽しく息抜きができる)

(3) 話題提供2／乗り越えるべき課題と全国の挑戦

【講師：廣田貢先生】

次の話題提供として「乗り越えるべき課題と全国の挑戦」を紹介します。先ほど「こんな学校を実現していきたい」「こんな地域を実現していきたい」という色々な思いや願いを皆さんから出していただきました。一方、「理想のまま突っ走っていいの?」「本当に実現できるの?」と悩んでいる人もいます。今日の会議の前半に、新しい学校づくり、地域づくりを進めていく上で大切にしたい5つの視点をお話ししましたが、その中の1つ、「理想と現実のギャップを捉え、現状の危機感・困り感を克服する」必要があります。いま目の前に直面している課題から目を背けて理想を追い求めでも、結果としては課題が解消されていないので、その課題がずっと膨れ上がり、理想の姿が実現出来ないという結論に繋がっていきます。大切なのは、いま目の前に直面している課題を直視して乗り越えていくと共に、それとセットで理想の姿を追い求めていくことです。先ほどお伝えしたとおり、メリットを最大化、デメリットを最小化することです。そこには人、モノ、お金、情報、色々な視点があり、人やモノの予算、情報や意思、行動も課題の要素と思います。人が配置されていて、モノがあって、予算もあるけれども、関わる人達の意識がなかなか醸成されないこともあります。これもひとつの課題だと思います。

例えば、「カリキュラムはどう取り込むのか、そもそもそんなことが出来るのか」、「1人1人の個性を大事にしていきたい、こんなカリキュラムとしたい、でもそのカリキュラムは本当に実現できるのか」という疑問があると思います。また、「個別最適な学びというけれど実際どうするのか」、「先生のみだけでは無理じゃないか」、「教職員の人手不足や超過勤務の状況があって新しいことに取り組む余裕がない」、「小中一貫教育で教職員の負担が増えた場合はどう乗り越えるのか」、「適切な外国人人材が地域にいない」、「人口減少が加速して子供が減っている」という不安があると思います。他にも、「地域の接点が減少しているのに、どうやって繋がる場を作るのか」、「理想の姿を描いている人はごく一部で、多くの市民は他人事と思っているのではないか」、「色々な事務の予算が確保できるか」など、色々な課題が考えられます。

課題に直面した時に、そこから目を背けるようなことは勿論してはいけません。加えて、その課題を直視した際、そこで立ち止まらないことが大切です。これは今まさに皆さんが直面している状況だと思います。目の前にある壁をどう乗り越えるか、現状を突破する手立てをどう考えるのかがとても大事です。

さて、全国には魅力ある学校や地域を創造して、子供達の未来を切り開いている、そんな挑戦をしている自治体あるいは学校が沢山あります。長井市にもそれは出来るはず、ということで紹介したいと思います。

①特色・魅力あるカリキュラムの実現

始めに、「特色・魅力あるカリキュラムの実現」について紹介したいと思います。文科省の学習指導要領では、学校での授業に関し最低限の基準・標準時数などを定めていますが、一方で、特色あるカリキュラムをつくること出来るような道もあります。これは、特例制度を活用することで可能です。教育課程特例校制度では、学校・地域の実態に照らし合わせ、例えば新しい教科を設定していくことが出来ます。また、授業時数特例校制度では、学校の中で問題発見・課題解決型の学習に特

化することが出来ます。制限があるのであれば、その制限を乗り越えるために別の仕組みを使う視点が必要です。視点を変えれば道が開ける場合があります。

②個別最適な学びと協働的な学びの実現

次に、「個別最適な学びと協働的な学びの実現」について紹介します。資料ではGIGAスクール・ICT関連の情報を載せています。これについては、“すぐにでも”、“どの教科でも”“誰でも”活かせる1人1台端末の活用シーンがあります。学校生活の流れの中でPC端末を有効に活用していく具体的な例を挙げています。

1人1台端末を活用するシーンは変わりつつあります。コロナ禍による学校休校でオンライン授業やオンラインコンテンツによる宿題が始まりましたが、学校生活の落ち着きを取り戻した今では、そういう使い方はほとんどされていないようです。もしかしたら端末を使いこなせていない先生や、端末を使う必要はないと思っている先生もいるかもしれません。ですが、端末を上手く活用することで、個別最適な学びに近づくことが出来ます。

例えば最先端の技術、DXを活用した授業の改善支援の方法があります。具体的には、端末のカメラで子供達の目の動きなどを得ることで、生体情報や心理情報を活用した授業改善支援や、Webアンケートにより児童生徒の特性を把握し、個別最適な学びに繋げるといった例です。

一方で、個別最適な学びはPC端末に頼るだけで実現するものではありません。学校の先生以外の地域の方々が学びに関わり、沢山の眼差しを向けることによって子供達の心は育ち、子供達の学習意欲が高まっていくこともあります。PC端末だけに依存する学習展開ではなく、端末を活用しながら、どうやって地域がプラットフォームとなり子供達を支えていくかという視点も大切です。

③小中一貫教育コミュニティ・スクールの実現（縦のつながり・横の繋がり）

地域について考えていく際に、「小中一貫教育コミュニティ・スクールの実現」という形も想定されます。小中一貫教育で実現したい目標として、15歳の姿・ビジョンをまずは共有します。そして系統性・連続性のあるカリキュラムを作り、そこへ教職員が協働していきます。その際、小学校と中学校の先生がしっかりと対話をしていく必要が出てきます。小中一貫教育では従前無かった打ち合わせが必要になるので、教職員には当然負担感が発生します。この点、働き方改革も同時並行にどうやって実現していくか手立てをしないと、小中一貫教育のデメリットばかりが強調されることとなります。メリットを最大化し課題を最小化するために、どんな対策を講じていくのが大切になります。

先ほど紹介した東京都三鷹市の事例ですと、三鷹市のパワーアップアクションプランでは、15歳までの義務教育9年間の生き方を考えた際、どのように地域に関わり、保護者が関わり、最終的なゴールに近づいていくのかをマトリックスで図示しています。

次は、長野県塩尻市の小中一貫教育の事例を紹介します。塩尻市では総合的な学習の時間などを活用して、小学1年生から中学3年生までの9年間のカリキュラムのなかで、「地域の良さを発見する学習」として故郷「たのめの里」に関する地域学習を行っています。例えば地域にどんな人が生き、自分達に関わってくれているのか、あるいは地域の文化や自然、産業などを学んでいきます。最終的には「かけがえのない両小野」を意識した子供達の育成に繋げていくことを目標としています。

他方、児童生徒1人1人の自己有用感を育む取組みとして、「自分の良さや可能性を発見する学習」も行っています。例えば小学1年生時に保育園児との交流を通じて、1年生はお兄ちゃん・お姉ちゃんとして自分の自己肯定感・有用感を感じられるようになります。学年が上がるにつれて、自分の良さや役割を考え、自分を生かすことに取り組み、中学校では職業観や勤労観を育み、最終学年の中学3年生時には「自己実現に向けて歩み出す」ことを目標としています。この事例では、最終的なゴールとして15歳の理想の生徒の姿を設定し、それに向けた各学年での歩みを系統的に設定しています。子供達を最終的なゴールに近づけるために、地域ぐるみでどう支えていくのか、学校ではどのように児童生徒がチャレンジし、自分たちの可能性を広げていくのか、大切なのは、それを受け入れられる地域をつくっていくことです。

④地域に限定されない外部人材の活用（世界・社会をつなぐ）

次に、「地域に限定されない外部人材の活用」について紹介したいと思います。

「地域には良い人材がないので、こんなカリキュラムは実現出来ない」と思うのではなく、目線を外に向けて、その人材はどこにいるかを考えてみると良いと思います。「教室と社会をつなぐ」例として、「教室から世界一周」を手掛けている民間企業では、世界と日本の教室をオンラインで繋いで、アフリカ、イギリス、アメリカなど、様々な国の同世代の子供達と意見交換が出来る場を提供しています。自分達の価値観、日本人としての価値観だけでなく、世界と触れ合い多様な価値観を感じるによって、先ほどのワーク1の意見で挙がっていたような、多様性への配慮ができる学校づくりに繋がっていくのではないかと思います。

探究的な学びに特化した民間企業もあります。例えば建築について自分で調べて、パスタを使って自分で構造物を作ってみる課題があります。構造を意識しながらパスタを使って建物や橋を組み立てていくと、リンゴ1個くらいは載せられるような強度ができます。

このように、子供達の可能性・やる気に火を着けることを考えた時に、学校の中で閉じるのではなく、学校の外に開くことで色んな可能性が広がっていきます。外部人材として民間企業を活用することは、あくまで一例です。外に目線を向けることで、今まで出来なかったことが出来るようになる例として紹介しました。

⑤子供達を核とした地域づくり・地域活性化

次に、「子供達を核とした地域づくり・地域活性化」に取り組んでいる浦幌町の事例を紹介します。人口減少という課題があり、地域がどんどん衰退し、これからどうしていくかを考えた際、子供達はこの街に住みたい、でもここには仕事がない、ならば仕事をつくっていこう、という動きが浦幌町で生まれました。子供達を支援していく取り組みから派生して、若者の仕事の創造事業に取り組んだ結果、浦幌町には若者が集まってくるようになり、20歳代の人口が増えています。これを実現するために、浦幌町では企業版のふるさと納税をどんどん活用しています。自治体の予算が足りなければ、どうやって外から得るかという発想に切り替え、アイデアを実践しています。

次に、島根県の隠岐島前高校で行っている地域課題に対する取り組みを紹介합니다。隠岐島前高校では、地域の未来を創る人財を育てる新カリキュラムを創設しました。これは地域のリアルな課題に目を向けて、子供達が単に学校の授業だけでな

く社会と接点を持ち、地域と共に子供達が学び続ける環境を整えている事例です。

全国の事例を参考にして、とにかく目線を外に向けていくことで、今まで出来なかったことが出来るようになる、そんな可能性を前向きに考えて頂ければと思います。目の前にある課題から目を背けることは出来ませんが、それを直視しながらも、解決していくための手立てとして他所の事例を学び、そこから自分達は何か出来るのかを考えていくことが大切だと思います。

●より多くの人を巻き込むアクション

「より多くの人を巻き込むアクション」として、熟議やワークショップを粘り強くやっていくことが大事です。色んな機会を通じて、人との関わりの場を作っていくことで、1つ1つ地道に解決していくことが大切です。

●学校の働き方改革の推進

最後に「学校の働き方改革の推進」です。これはまさに今、全国の学校で直面している課題です。これにもあらゆる手立てが考えられます。そもそも学校の業務を断捨離する・見直すこと、地域の人材を活かすこと、業務内容によってはICT化で効率を進めること等が挙げられます。手立てはいずれか1つではなく、色んなものを組み合わせながら課題を最小化していく、そんな議論が展開出来れば良いなと思います。

(4) グループワーク 2

【講師：廣田貢先生】

次に「理想を実現するための具体的な方策を提示する」ワーク2に移ります。先ほどの全国の事例でも色んな課題があることを紹介しました。けれども、乗り越えられない壁はない、ということで、皆さんからこれまで頂いた意見、子供達の理想の姿、目指すべき学校・地域の姿を意識しながら、その姿に近づくためには具体的にどんな方策、手立てが必要なのか、グループでの対話を通して提案いただきたいと思います。

この検討委員会では「提案したものが本当に出来るのか」という、とてもいい疑問が挙がっていました。これについては、実現・可能性を考慮してブラッシュアップしていくというプロセスがありますので、まずは「この施策に取り組んでいくことが必要」という取り組みを書いていくことが大事だと思います。先ほどご紹介した参考資料のアイデアを使っても結構です。色んな可能性、手立てがあることを意識しながら、壁を乗り越えて理想を実現していくための具体的な方策・手立てを皆さんで考えて頂きたいと思います。

ワーク2の時間は25分間とします。付箋に書く作業は10分を目途とします。私が先ほど照会した参考資料を見ながら、あるいはこれまでの皆さんの意見を思い出しながら付箋に書く作業を進めてください。その後、グループで対話をしながら、強く共感したものや、是非取り組んでいきたいと思うものなど、15分程度で模造紙にまとめる作業を行います。ワーク1で使用した模造紙は机の端に置き、振り返りのために見ながらワーク2の模造紙を完成させてください。ワーク2の模造紙は、ワーク1のように学校と地域で二分するやり方もありますが、例えばコミュニティ・スクールのように両方にまたがるものは無理に分ける必要はありません。模造紙に貼っていくときに、明らかに学校または地域の方策というものがあればまとめ

る程度で結構です。それではワークを始めてください。

《ワーク2→他グループの見回り（共感の時間）》

- グループワークの模造紙、共感シールの集約結果は次ページ以降のとおり
- 共感が多かったキーワード・付箋についての凡例は次のとおり

●まとめキーワード（付箋ワードを集約したもの）《ゴシック体》

共感 7 以上…網掛、太字、下線付き

共感 6～4…太字、下線付き

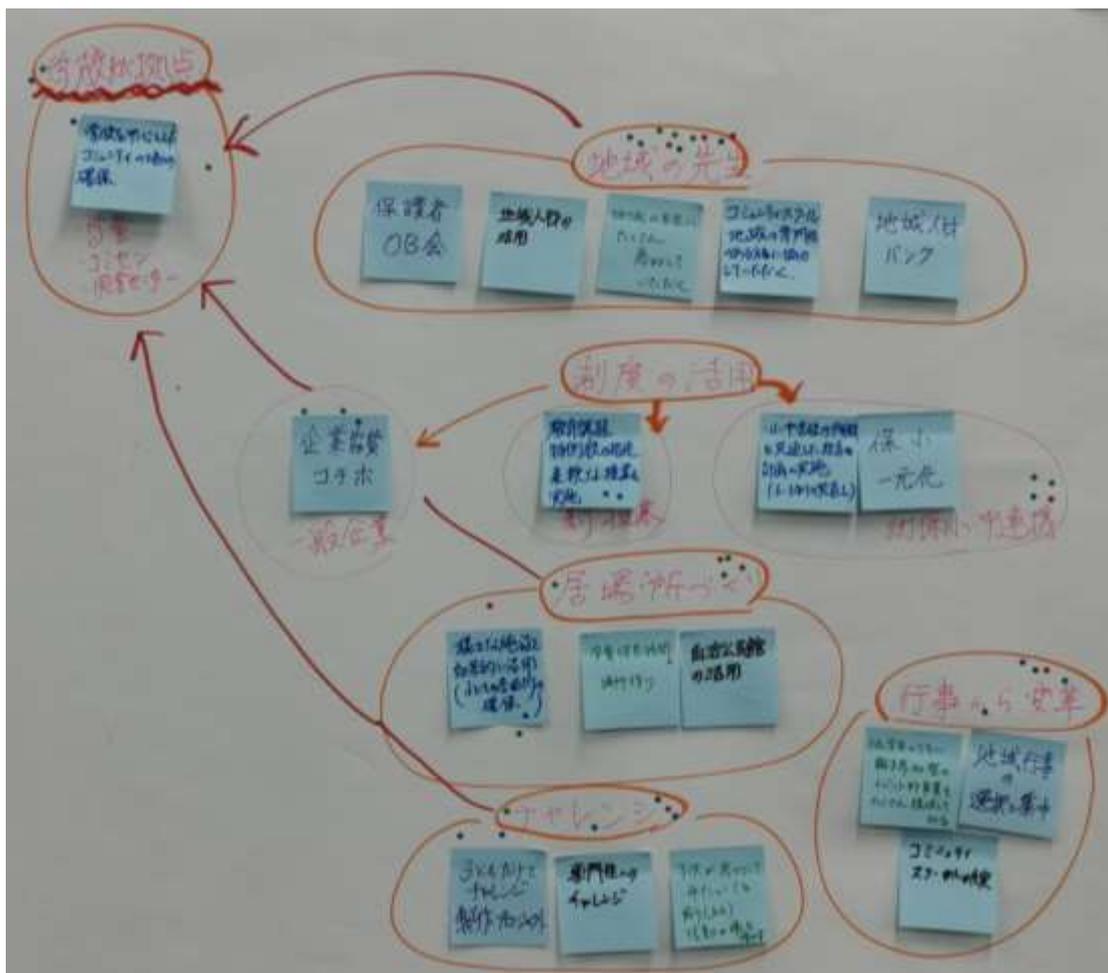
共感 3～1…下線付き

○付箋ワード 《明朝体》

共感 7 以上…網掛、太字、下線付き

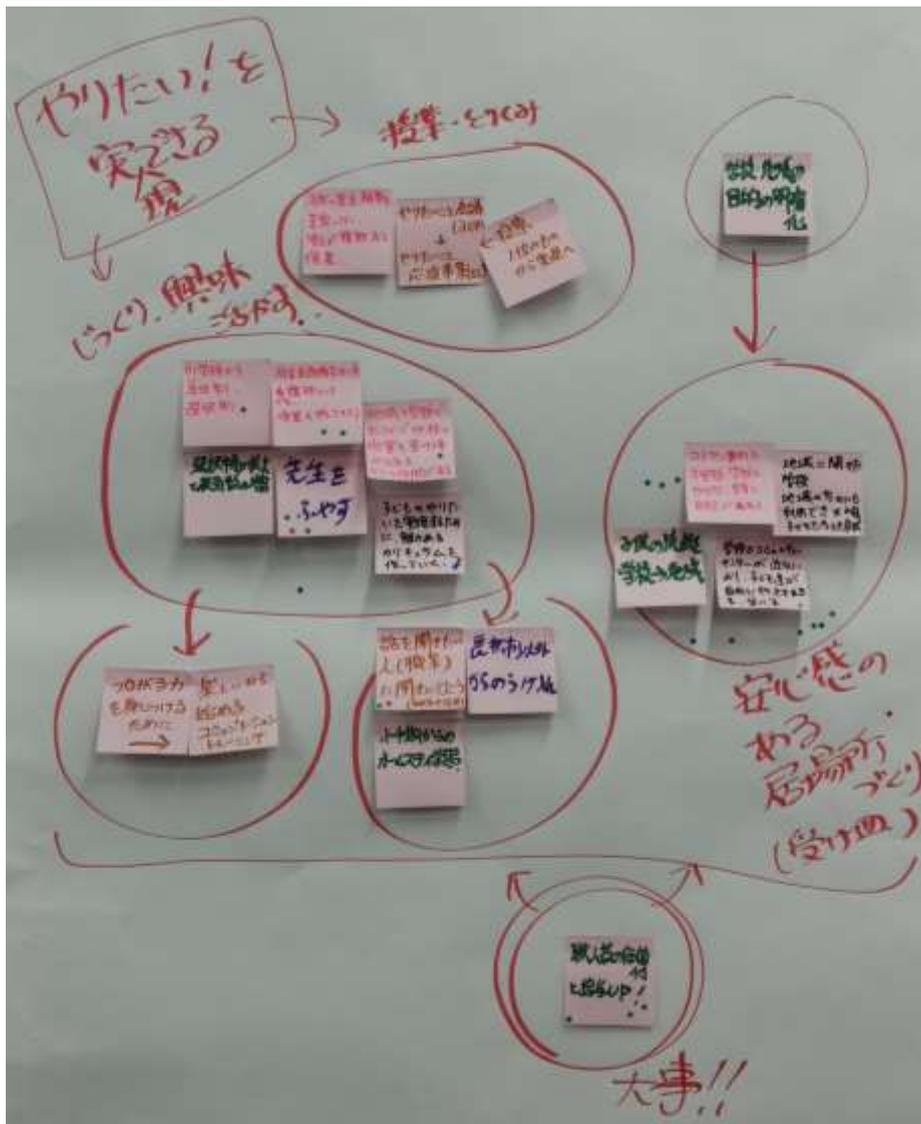
共感 6～4…太字、下線付き

共感 3～1…下線付き



4. 理想を実現するための具体的な方策とは

- 10…**地域の先生** (地域人材の活用、地域の先生に沢山参加してもらう、地域人材バンク、保護者会OB、コミュニティ・スクールへ地域の専門家に協力してもらう)
- 5…**居場所づくり** (○3…様々な施設を効果的に活用、学童保育時間の場所づくり、自治公民館の活用)
- 5…**チャレンジ**… (○2…子供だけでチャレンジ制作プロジェクト、専門性へのチャレンジ、子供が参加したいと思える活動の場を増やす)
- 5…**行事から変革** (地域行事の選択と集中、低学年からの親子参加型のイベントの提供、コミュニティ・スクールの充実)
- 4…**幼保小中連携** (小中学校の9年間を見通した教育計画と6・3制の見直し、幼保小一元化)
- 2…**学校が拠点** (○2…学校を中心としたコミュニティの場の確保、学校に学童・コミセン・児童センターを)
- 丸なし…**制度の活用** (○3…企業協賛コラボ、○2…教育課程特例校の指定で柔軟な授業を実施)

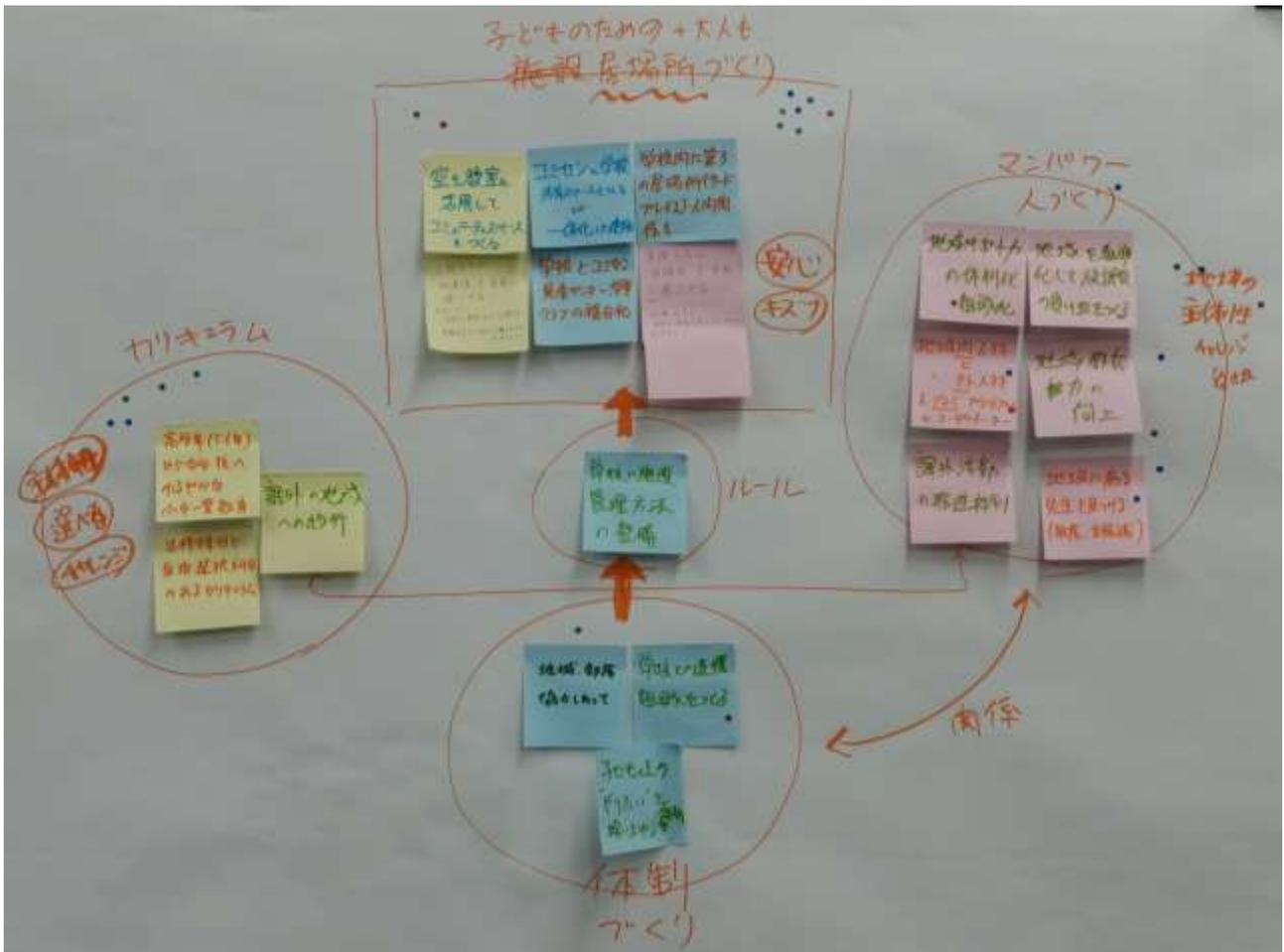


4. 理想を実現するための具体的な方策とは

- 7…安心感のある居場所・受け皿づくり (○3…コミセン内に不登校・学校に行けない子供を受け入れる場所がある、○1…学校とコミセンが近くにあり子供達が自由に往来し学べる、子供の流れを学校から地域へ、地域に開けた学校、地域の方々も利用できる子供達と触れ合う場所)
- 2…じっくり興味を活かす (○3…魅力あるカリキュラムを作る、○3…先生を増やす、○2…話を聞きたい人・職業に話を聞きに行く (オンラインでも)、○2…教員免許が無い方でも講師として授業を持ってもらう、○1…小学校から単位制・選択制、○1…オンラインで他校の授業を受けられる、○1…長井市以外からの受け入れ、小中学生からのホームステイ学習、選択幅の拡大と教員数の増員、繋がる力を身に着けるために楽しく始めるコミュニケーショントレーニング)
- 丸なし…“やりたい”を実現できる授業・取組 (子供の意見・回答を否定しない、答えが複数ある授業、子供による「やりたいこと会議」、大人による「やりたいこと応援事業」、投票で1位になったものから実現させていく取り組み)

○3…職人技の価値付けと給与UP

丸なし…学校・地域の目的の明確化



4. 理想を実現するための具体的な方策とは

- 9…子どものための(+大人も)安心と絆を育む居場所づくり (空き教室を活用してコミュニティスペースをつくる、コミセンと学校の共有スペースをつくるか一体化した建物とする、学校内に第3の居場所(サードプレイス)と人間関係をつくる、学校とコミセン・児童センター・学童クラブの複合化、子供達が放課後を自由に過ごせる、教室等を開放し宿題等しながら親の迎えを待てる、地域の人に場所を開放できる人を募る(お店など))
 - 7…地域の主体性や子供のチャレンジの受け皿となるマンパワー・人づくり (○2…地域内・外の人材を繋ぐプラットフォーム・コーディネーター、○1…地域に居る先生を見つける、○1…地域サポート力の体制化・組織化、地域を組織化して放課後の受け皿をつくる、課外活動の推進体制、地域教育力の向上)
 - 5…主体性をもって選べる・チャレンジできるカリキュラム (必修科目と自由選択科目のあるカリキュラム、5・6年生から中学校へ通う緩やかな小中一貫教育、課外授業の地域への移行)
 - 1…学校と地域の連携を図る体制づくり (○1…学校との連携組織をつくる、子供達の“やりたい”を拾い上げる体制、地域で協力し合う)
- 丸なし…ルールづくり (学校の施設管理方法の整備)

(5) 全体共有

【講師：廣田貢先生】

それでは、今日のワークショップの共有をしたいと思います。各グループ間でも共通項がいくつかありました。

1つ目はマンパワーの話がありました。教師一人一人の力量という意味も勿論ありますが、先生だけでなく地域の方がどうやって関わっていくのか、地域の力をどうやって学校に活かしていくのか、という意味のマンパワーでした。これに関連し、人材の確保、人材バンク、専門性の向上等のご意見がありました。

2つ目はカリキュラムの話がありました。主体性を意識し、子どもたちがやりたい事を実現していくという観点から、選択・チャレンジしていくカリキュラムや、ICTを活用した授業の強化といったご意見がありました。

3つ目は学校とコミセンを始めとした地域との連携の話がありました。これはほぼ全てのグループで挙がっており、共感シールも沢山貼られていました。子どもと大人の居場所づくり、安心感のある居場所づくりという観点を、皆さんはとても重視していらっしゃるようです。

全国の事例の中でも、地域・社会と連携していくところの「共創空間」というものがあります。これは地域の人づくりや地域の魅力向上のみならず、一人一人の子どもたちに対して、地域の方が常に寄り添い続ける環境を学校の中に作っていくというものです。既存の学校施設を長寿命化改修する際に、そこに地域の方々の居場所をつくり、コミュニティの拠点としての共創空間をつくった事例があります。

コミセン以外にも、図書館や子育て支援センターの併設事例もあります。図書館では図書貸し出しの体験メニューを用意することで常に子供達が図書館に居られる環境にしたり、子育て支援センターとの連動では小学生が幼児のお世話を通して自己肯定感や達成感を育んでいく取り組みが行われています。既存の学校を活かし、そこにどんな機能をドッキングするかは、単に財政の効率化を目的とした施設集約ではなく、いかに価値を集めていくのかという視点で考えていくことが大切になります。

加えて小中一貫教育の話もあり、これについても共感が集まっていました。全体を振り返ってみますと、マンパワー、カリキュラム、そして居場所づくりや地域との連携・協働という意見に多くの共感が集まっていました。

こんな学校や地域を創りたいと皆さんが挙げて下さったご意見と、共感が広がった施策は決してぶつ切りではなく必ずシンクロしています。ワーク1でチャレンジが出来る学校、あるいは可能性を広げられる学校にしていきたいというご意見がありました。それに対し、共感が広がった施策もそこに結びつくようなものが挙がってきました。子供が“やりたい”ことの実現や、多様性や専門性を重視した授業は多様性を広げる居場所づくりに繋がりますし、選択教科を設けることは、より子供達の可能性を広げていくことに繋がります。

いずれにしても、やりたいこと・理想的な姿と具体的な施策策は今お話したように少しずつ結び付いてきたので、将来構想の最終報告に向けて、課題克服の肉付けについては引き続き事務局で整理して頂きたいなと思います。

最後に、私が数年前に中教審の答申を書いた際、ページの最後に記したメッセージを紹介したいと思います。『誰かが何とかしてくれる、のではなく、自分たちが

「当事者」として、自分たちの力で学校や地域を創り上げていく。子どもたちのために学校をよくしたい、元気な地域をつくりたい、そんな「志」が集まる学校、地域が創られ、そこから、子供達が自己実現や地域貢献など、志を果たしていける未来こそ、これからの未来の姿。』

学校や地域づくりをしていく際には「志」が大事です。「コミュニティ・スクール」や「地域コミュニティ」という言葉がありますが、「コミュニティ」には「支援」という意味もあれば、「同じ目的を持った集まり」という意味もあります。これからの長井市には「志」が集まる学校や地域をつくっていくことが必要です。そして、どんな子どもたちを育て、どんな学校・地域をつくっていききたいのか、ビジョンをみんなで共有し、具体的な行動に移していくことが大切です。

「志」が集まり、具体的な一歩を踏み出す際に必要となるのが、目標・ビジョンを共有し、行動していくための「対話の風土」をこの長井市につくることです。今ここにいる皆さんには、地道な対話の積み重ねが「対話の風土」に繋がることを意識していただきたいと思います。将来構想検討委員会の取りまとめと、この先の具体的な一歩に繋がるよう、最後にお話させていただいたところです。

6 検討委員会としてのまとめ

【事務局/佐藤教育総務課長】

廣田先生、長時間に渡りご指導ありがとうございました。それでは、検討委員会としてのまとめとして、迎田委員長、江間副委員長からご講評を賜りたいと思います。よろしく願いいたします。

【迎田委員長】

私からは講評というよりも、皆様のご意見を伺った感想を述べたいと思います。前回第3回の講評において、私からは、学校、家庭、地域の役割は何であるか、その境界が曖昧になる不安も感じている、という感想を述べました。また、前回のワークでも、それぞれの立場で、あちこちで、いろんなことを総がかりで、子供の教育に関わっていく事がポイントになっている、とお話しました。今日の廣田先生のお話の冒頭でも、子供を中心に考えましょう、と提示があり、我々は子供を中心に考える必要があることを改めて確認させていただいたところです。

今日のワークでは廣田先生に話題提供を頂きながら、各委員からも「選択」と「多様性」については色んな所で語られたと思います。「多様性」は「障がい」「ジェンダー」「人種」などがありますが、一人一人の「興味」と「関心」も多様性に含まれます。これが「選択」と相まって、これからは色んな所で「多様性」への対応が求められてくると思います。そうしますと、「選択」と「多様性」を次のステップに進める場をどうやって設定するか、それを実現するためのマンパワーをどうやって集めるか、これが今後の課題であると感じました。

そして廣田先生にお示し頂いた、子供達本人が何を実現したがつているのかは忘れてはいけない視点です。子供達の声はどう反映するのか、子供達の声はどうやって刷り込んでいくのか、その作業も大事であると思いながら、廣田先生のお話をお聞きしたところでした。どうもありがとうございました。

【江間副委員長】

皆さんの議論を見ていて、私も考えさせられたこと、なるほどな、と発見させられたことがありましたので、3つお話ししたいと思います。

1つ目は、今日のワークショップの中でもありました「共感」が集められるかどうか、という点です。廣田先生のお話を聞いて、本当にそうだなと思いました。今日皆さんの模造紙と付箋を見せて頂いて、一番共感し、引き付けられたのは、グループDの、「校舎の中に小さな地域（コミュニティ）をつくろう」という発想です。それらをまとめると、「学校の中に学校じゃない場所をつくろう」というものです。学校が本来持っている意味を、そこに関わってくる人の関係で見直してみよう、という事だと思います。子供を真ん中に見据えた際に、先生だけでなく地域の大人がどう繋がっていくかを考えることになりませんが、地域の方が学校に行きたいと思うかも大事になります。私の関わってきた地域の学校でも地域の方がゲストティーチャーをすると、子供達から先生と呼ばれるのが心地よくて元気になります。自分が生涯培ってきたことを子供がリスペクトしてくれて先生と呼んでくれることが、地域の大人にとって力をもらえることがあります。学校の中に地域の方が入ることによって子供が元気になるだけでなく、地域の方も元気になり、そういう姿を見て先生も元気になるような、「学校の中に小さなコミュニティをつくる」という発想に、今日はなるほどな、と共感しました。ありがちな「学校と地域との連携」と比べると、より厚みのある言葉だと思います。

2つ目は多様性に関することです。「学校の中に小さなコミュニティをつくる」のと同じように、「学校の中に色んな世界との窓口がある」「学校の中に世界との繋がりがあがる」というのが大事だと思います。学校に来ることで世界の人、色んな職業の大人と繋がれること、学校が、子供達の経験する世界の様々な出来事の窓口になることを考えていくのが大事であると、皆さんのグループワークのお話を聞いて思いました。なお、学びの選択に関しては、選択肢があることは良いのですが、子供に選択を求めると、なかなか選べず迷いたい子もいます。迷い考える際に、いろいろな人に出会うこと、いろいろな窓を覗けることが保証されれば、徐々に自分の意思で選択が出来るようになるのではないかと思います。

3つ目は、今日のグループワークでも、また廣田先生のお話でもありました「安心感」についてです。「チャレンジ」という言葉もワークで挙がっていましたが、子供達は「安心感」が無ければ「チャレンジ」しようとは思わないのではないのでしょうか。自分はここで挑戦しても良いんだ、という裏付けが無いと、前向きにチャレンジすることも出来なくなると思います。チャレンジすれば、当然失敗も伴います。上手くいく事ばかりを続けるのをチャレンジとは言いません。失敗したときに、もう駄目だとあきらめるのか、それとも自分にはまだ伸びしろがあると自己肯定感に繋がられるかの分岐点があります。

教育学では今「レジリエンス」という用語が流行ってしまっていて、元々は「弾性」という意味の言葉ですが、へこんでも元に戻る弾性から転じて、教育用語としては「復元力」という意味で使われています。今の社会は厳しくて、失敗しても復元して立ち直りを求められます。目標に向かって進んでいく際に失敗はつきものですし、失敗したときに自分一人で解決できることは限られています。そんな時に、誰かに助けを求めたり、逆に誰かから求められれば助けてあげることが、今日のワー

クで出てきた「安心感」に関して、必要になるのではないかと思います。

最後、補足です。大人が学校に関わると「何とか助けてあげよう」という雰囲気になりがちですが、むしろ大人自身が楽しみで学校に行き、学校に行くと自分の方が元気をもらえる、そういう関係づくりを目指して、私自身はいくつかの自治体と学校のコンセプト作りに関わってきました。今日、皆さんのご意見を伺って、改めてこういう方向性を大事にしていきたいと思いました。また、廣田先生のお話の中では「共創空間」という言葉があり、これも大事なコンセプトとして学ばせていただいたところです。どうもありがとうございました。

7 その他

【事務局/佐藤教育総務課長】

迎田委員長、江間副委員長、ありがとうございました。それでは、その他について、事務局から何かありますか。

【事務局/新野教育総務課主査】

本日も皆様から熱い想いがこもったご意見を賜り、本当にありがとうございました。頂いたご意見を大事に受け止め、事務局で将来構想（案）を練ってまいります。私からは、次回会議までの流れを説明申し上げます。今日のワークショップで頂いた意見を元に将来構想（案）を作成し、1月中に一旦、委員の皆様へ郵送で提示致します。この時点でご意見があれば承り、ブラッシュアップを図ります。また、廣田先生にもアドバイス頂きながら、第5回会議に提示する将来構想（案）を作成してまいります。最終回となる第5回の会議は2月中を予定しております。委員の皆様のご出席について、どうかよろしくお願いいたします。

8 閉会

【事務局/佐藤教育総務課長】

これをもちまして、第4回長井市小中学校将来構想検討委員会を閉じます。本日のご出席、誠にありがとうございました。

以上